

サー風情の女…」と言ったとか言わないとかで憤慨したもの、今となっては微笑ましい思い出です。就職してから今まで、何の迷いもなく働らき続けてきたと思われるかもしれませんが、私なりに可成の山坂は越えてきたつもりです。何しろ、そこは江戸ッ子(東京ッ子?)意地っぱりと負けん気でもっているような私ですから、その度に「なにを!」という具合に、逆にがんばってしまうのです。

結婚の段階では、やめる気はありませんでした。つれあいとなる人も反対はしなかったし、先輩に既婚で母親という人もいましたし、共稼ぎは出来そうだったからです。しかし、出産の時はそうはいきませんでした。周囲は、母親になればやめるものと、ほぼ確信していましたから。当人はといえば、7年で丁度仕事が面白くなった段階で、やめるなどと考えられなくなっていました。一騒動ありそうな所、丁度よく(?)主人が留学生試験に受かって外国に行くことになり、うやむやのまゝ続けてよいことになってしまったのです。

子供も二人になると、まあ寛大だった主人の態度も微妙に変わりました。「子供の為に……可哀いそうだと思うのか」と言われるまでもなく私も迷いました。アナウンサーの仕事は、表面のある部分は華やかですが、NHKの職員なので、地味な、つまらないと思われるような仕事も沢山あります。1日中狭いスタジオの中で、番組の粋アナウンスをしたり、海外向けのニュースを讀んでいたりという日が続くこともあります。仕事がお医者様だったり、学校の先生だったら、多少の犠牲を払って働いていても、社会の役に立っているのだ、人の為になっているのだと思うことが出来るでしょう。でも私の場合は違います。がんばって仕事を続けているが、これでよいのだろうか。子供の、彼等にとっては二度とない時期を、家庭で暖く見守ってやるべきではないのか。家族に犠牲を払わせて働いているのは、私の我がままではないのか。真剣に考えた時期でもありました。

何時のまにか、女性アナウンサーの最古参で東お役をしなければならなくなり、女性故に昇進が遅いと言われながら管理職となってからは、また違った悩みも生まれました。そして、現在は仕事の先行きも含めて、平均余命の30年程をどう生きるか。中学生の娘に先輩として、どういう生き方をすればよいとアドバイス出来るのか、考えこんでしまっているところなのです。(1回生)

(女性と職業についてなら、表向きはもっと偉そうに勇ましいことも書けるのですが、気取っても仕方ないので、これは本音です。)

## 尾瀬と生徒

前沢光子

7月下旬、Nさん(41年卒)の引率するハイキングクラブと一緒に尾瀬を歩いてきた。大清一三平峠一尾瀬沼一尾瀬原一鳩待峠の一般向きのコースをとった。

三平越えの道はブナやミズナラの緑こい気分のよい道であったが、数年前建設されかけた車道が、所々にその醜い姿をさらけ出している。さいわい反対運動で工事は中止された。また再開されぬとよいかなどと思いながら歩く。生徒はベチャクチャよくしゃべる。時々、「早い」「少し休んで」「疲れ

た」…と叫ぶ。疲れていない証拠である。そのうち静かになり荒い息づかいだけが聞えてくる。岩清水で喉を潤し満足げに微笑み、時では「大変だったね」「よく登って来たね」と互の労をねぎらい合う。やがて樹間に尾瀬沼が見える。光っている。静かである。ウアーと歓声をあげながらかけるように下りて行く。湖岸でNさんの説明。が生徒はポカンと口をあけ放心したように沼をみている。沼沿いの道は暗くじめじめしている。その中にカラマツ草の白い花が浮ひあがるように咲いている。長葺小屋に着いた時は太陽はかなり西に傾いていた。小屋付近の大江川湿原は例年なら日光キスグの花で埋めつくされているのに今年はまばらである。7月初旬のおそ霜にやられたのだそうだ。ワタスグやサギスグもまたみすぼらしい。

スカートにはきかえバスタオルを抱えて風呂に行く生徒は「何よその恰好、だめ」と一喝される。両手に抱え切れぬ程お土産を買い込んできた生徒は「明日もあるんですよ。重いなんて言たって知りませんよ」と言われて首をすくめる。……こんな生徒にどうなっているのかと首をかしげあきれ果てる。

5時起床の予定を、あの歩きぶりではと4時にたたき起す。4時20分出発。グズな生徒にしては上出来である。朝霧の中から沼が浮ひ出して来る。水ぎわのフトイやミズガンツが音もなくゆらいている。声もなくじっと見いる。そして深い溜息をつく。沼尻川沿いの木道を黙々と歩く。白砂湿原をすぎブナ林に入る。やがて視界が開け正面に至仏山が姿をみせる。いよいよ尾瀬原である。ここでNさんの尾瀬原の説明。くいいるように原をみつめている。

原の一隅を山吹色に埋めつくす日光キスグ、食虫植物にしては白く可憐な花をつけているナガバノモウセンゴケ、黒紫色の何ともさえぬクロバナノウゲ、トキの羽の色から名付けられたトキ草……池塘の中には、未の刻になると花をとじるヒツジグサ、丸い葉をのんびりと浮かせボツンボツンと黄色の花をつけるオゼコウホネ…と次々に花をゆびさすけれども、生徒はあまり関心を示さず、たゞ申し訳け程度に「ヘイ」と言うだけ。そして専ら俗界の噂をし、思い出したように「足の裏が痛い」「こんなに歩くとは思わなかった」「早くバスにのりたい」とブツブツ言う。全くあきれたものである。

上田代で昼食をとっていると雲ゆきがどうもあやしい。早々に引上げ、1時すこし前鳩待峠に到着。途端、雷鳴と共にすさまじい雨。「早く出てよかったわね」と顔を見あわせる。

ここに登場する生徒は中学1、2年生で、高校生は黙々とよく歩き、説明にはよく耳を傾け、なかなか立派なものである。しかしこの中学生も9月の教室で、尾瀬の美しさを、自分達の強行軍を「すどく」「すどく」を連発しながら、誇らしげに語っていた。(5回生)

## 人間文化研究科に入って

小玉 美意子

昨年の6月29日、わがお茶の水女子大学博士課程の人間文化研究科は開講しました。本学はじめ